

アストンの「神道」著作に関する予備的研究
(その1) 神道論試訳

A Preliminary Study of Shinto Articles by W.G. Aston
Part 1: A Translation of Shinto (TPJSL)

片山 博

KATAYAMA Hiroshi

William George Aston (1841-1911), together with E.M. Satow and B.H. Chamberlain, laid the foundations of the study of Japan and Japanese cultures in Britain as well as in other Western nations more than one hundred years ago. Among his numerous works of the Japanese language, literature, history, religion, etc., there are three articles on Shinto. The first and most comprehensive is *Shinto: The Way Of The Gods* (1905), followed by *Shinto: The Ancient Religion Of Japan* (1907) and *Shinto* (1908). In this paper the third article is translated for a thorough examination and comparison of the three Shinto articles by Aston in the future.

はじめに

アストン [William George Aston (1841-1911)] は, サトウ [Sir Ernest Mason Satow (1843-1929)] やチェンバレン [Basil Hall Chamberlain (1850-1935)] と共に、イギリスにおける日本学の基礎づくりに功績のあった三大学者と称される。1864年にイギリス公使館の通訳生として江戸に赴任以来、激動の幕末・明治期を日本で過ごした。主として日本アジア協会紀要 (*Transactions of the Asiatic Society of Japan*) に拠って、本来の外交問題の外、言語、文学、歴史、宗教など多様な分野の研究を発表した。アストンの代表作としては、『日本書紀』の英訳 (*Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to*

A.D.697. Translated from the Original Chinese and Japanese, 1896.)や『日本文学史』(A History of Japanese Literature, 1899)、『神道』(Shinto: The Way of the Gods, 1905)などがある。

Shinto: The Way of the Gods (以下「神道1」と略す)は、補永茂助・芝野六助共訳により『日本神道論』として1922年に明治書院から刊行され、新たに、安田一郎の訳になる『神道』として1988年に青土社から刊行された。一方、*Shinto: the Ancient Religion of Japan* (以下「神道2」と略す)は、白石喜之助・山本節共訳になる『神道：日本の古代宗教』として1930年に新生堂から翻訳版が発行されている。これらの先行2書に対して、ロンドン日本協会紀要(*Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*)に発表された *Shinto* (以下「神道3」と略す)については、寡聞にしてその翻訳版の存在を知らない。アストンの神道観を知る一助として、以下に「神道3」の試訳を掲げる。訳文中の()は原著の補足を表し、[]は訳者の補足を示す。紙幅の関係で、今回は論文の約半分の掲載に止め、原注の訳出も次回に回す。

W.G. アストン「神道」 『ロンドン日本協会紀要』7号、1908 .

『十九世紀』誌に発表された最近の論文の中で、著者のハーバート・ジャイルズ氏は、日本文明を構成するあらゆる要素が中国から多大の恩恵を蒙っている点を詳しく述べている。それにもかかわらず、日本が未だ中国の影響を受けていない時代を見つけることは可能である。西暦紀元頃、中国の典籍に現れ始める断片的な記述は、中国人とは顕著に異なった日本人像を我々に示している。日本語の最も古い実例は、構造及び語彙の両面からみて、中国語とはまったく異なっている。民族学的にも同様の論が成り立つ。黄禍論者のいう日・中二国間の人種的類似性及び感情的共振性は、イギリス人とロシア人が同祖だと断じるのにほぼ等しい。古代日本の固有宗教である神道は、中国にその淵源を求めうるものをほとんど含んでいない。中国の学問を導入し諸書を編纂するのに費やした三百年の間に、神道の知識もその間に派生しているが、ある一定の外来要素が紛れ込んだことは否めない。しかし、それらは大して重要ではない。その主要な特徴において、神道は、一部の学者が熱心に関連性を主張している古代中国の国家宗教とは、明らかに区別できる。中国の主神

は天空を意味する「天」である。日本においては、「天」は神ではなく、神々の住む領域であるに過ぎない。中国では最高人格神である上帝も、日本にはそれに相当する神はいない。中国の神々がミカドに祝福をもたらす様祈願する古代の祭式は、古来の祝詞とともに伝承されたものだが、日・中両国の国家宗教について、その差異を非常に明白に例示している。

我々の古神道に関する知識の拠り所は、古事記、日本書紀、及び延喜式の三冊である。最初の二冊は八世紀初頭に編纂された。記紀は、日本の古い神話や伝説の記録を含んでおり、八世紀及びそれ以前に行われていた神道の歴史的な断片を含むものであるといえる。十世紀に編まれた延喜式は、祭式を扱っている。これらの典籍は古神道の全体像を提示する。それは日本人自身によって描かれたもので、従って、同じ初期の発達段階にある他の信仰祭式に関して、我々が利用可能な多くの証拠を損なわせる様な、無意識の偏見によって歪められてはいない。

古神道は、E.サトウ卿（我々の神道知識の確立者）、B.H.チェンバレン氏、フローレンツ博士及びその他の人々の著作によって、ヨーロッパ人にとっても大いに研究しうる学問となっている。このテーマに関する昔の著作者達は信頼に値せず、真摯な研究者にとっては無視すべきものである。ケンペルの神道説は滑稽なほど不正確である。

これら古い書籍に述べられている神道は、古代エジプトやメキシコの信仰祭式に近いレベルに位置する、未発達の宗教である。それは、数千ではないにしても数百にもものぼる神々を数える、未熟な多神教である。適切にそう呼ばれるべき最高神が存在せず、マックス・ミュラーが拝一神教（*henotheism*）と呼んだものの痕跡もあまりない。太陽女神アマテラスが神話と信仰の両義において最も重要な神である。アマテラスは臣従する低位の神々に囲まれ、それはミカドの宮廷が原型となっているが、主権者たるに相応しい者として語られている。しかし、アマテラスの支配は海や黄泉の国には及ばず、そして天国[高天原]に於いてさえ、すべての重要事項を決定する神々の協議会がある。

太陽女神の神話は以下の如くである。地上に生まれた彼女は、その光り輝く容姿の所為で天上に送られ、天上界の支配者とされた。弟のスサノオ（暴風雨の擬人化）は黄泉の国のカミに指名されたが、冥界に下る前に、姉に別れを告げるため天上界へ上った。日本紀によると、その激烈な神威の所為で、スサノオが天上に上る時海は動揺し、丘や山は大声に呻いたという。害意を疑ったアマテラスは、剣と弓矢で武装した戦士の装いでスサノオに対面した。スサノオは、黄泉に発つ前に暇乞いに立ち寄っただけだと釈明し、一緒に子供を儲けるよう提案した。これは以下の如くになされた。アマテラスは身に付けていた

剣と装身具を口中で噛み砕き、その碎片を吐き出した。この様にして八人の子供が生まれたが、マサヤアカツハヤヒ・アマノオシホミミ[正哉吾勝速日・天之忍穗耳命]と名付けられた第一子は、日本の伝説的な初代の主権者たる神武天皇の祖先であり、彼を通じてその子孫が今日に至るミカドの皇統である。これらの事跡は二百万年前に起こったとされている。

しかし、スサノオの神とアマテラスの神の関係は、永久に友好的なものとはなりえなかった。スサノオの本性は、姉の稲田の灌漑用水路を壊し、そこに馬を横たえさせ、神々の御衣を織っている聖なる機屋の中に、生皮を剥いたまだら馬を放り込むなどの、度重なる悪行の数々に明らかである。これらの侮辱に憤慨したアマテラスは、天の岩戸に身を隠し、世の中を暗闇とした。他の神々は仰天して岩戸の前に集まり、神話が構成された時代の神道儀礼に暗示されている手段によって、ようやくアマテラスを誘い出した。

もう一对の重要な神はイザナギとイザナミである。彼らは、太陽女神〔アマテラス〕、月の神〔ツクヨミ〕、風の神〔シナツヒコ〕、日本の様々な島やクニ〔大八嶋国〕、山の神〔オオヤマツミ〕、河の神〔カワノカミ；ハヤアキツヒ〕、海の神〔オオワタツミ〕、地の女神〔クナリヒメ〕、水の女神〔ミツハノメ〕、土の女神〔ハニヤスビメ〕、その他諸々の神々を生んだ創造神として表現されている。イザナミは火の神〔カグツチ〕を生んで死に、黄泉の国(冥界)に降るが、そこまで彼女の夫であるイザナギは追って来た。イザナギは、ヨモツシコメやその他の死と病の化身たちによって、結局追い返された。この神話が生まれた当時の日本人の心には、黄泉は(一部にはそう考えた人たちもいたが)現実の場所というよりは墓の隠喩であった。イザナギとイザナミは、実際には中国人の考える男性及び女性原理の擬人化であると推測するに足る理由があることから、比較的新しい起源の神々である。同様のことが、彼らの親神である造化の神、ムスビについても言える。ムスビはあまりにも抽象的であって原始的な神とは言えない。非常に早い時期に、ムスビはカミムスビとタカムスビの二柱の神に分かれたが、カミ(神)とタカ(高)は本来同一の人格を表す単なる形容辞に過ぎない。後に他のムスビが加えられ、五柱にまでその数を増やした。いずれにせよ、このムスビの神は帝政期の日本においてかなりの人気があった。しかし、ムスビの神は高尚過ぎて世俗の好みにあわず、その信仰は長い間軽視されてきた。

食物女神であるトヨウケヒメは、太陽女神アマテラスと並んで、日本の至聖所である伊勢の地に神宮を有する名誉を担う。神話によると、トヨウケヒメはスサノオに殺されたと言い、また別の説によれば、月神ツクヨミに殺されたとも言う。トヨウケヒメの体の様々

な部位から産出したあらゆる穀類は、彼女の慈しむ人類が食物を耕作する種として、アマテラスによって保存された。伊勢の地を除いて、食物女神は、いまでは大部分が穀物神である稲荷に取って代わられている。食物神の名前や性別の違いは、現代神道学者がこれら二柱の神を同定する妨げとはなっていない。

男根崇拜は古神道の際立った特徴であった。その象徴は生殖 = 生命力を表すものと考えられ、従って、(悪鬼として人格化された)生命を脅かす靈気、より具体的には伝染病を追い払う魔術的装置として用いられ、このような方法で人間に奉仕するものとして神聖視された。この信仰は、長い間公式の神道から姿を消していたが、しかしその痕跡は遠隔地、特に日本東部に今なお見られる。おそらく、毎年行われる京都の御霊会の大祭を見物した人や実際にその祭りに参加した人たちでさえも、その主要な見ものが猥褻性をそぎ落とした男根行列であると気づいている人はほとんどいないであろう。

もう一柱の重要な神は、出雲大社の祭神である、オオナモチである。彼は国土造成神であり、しばしば国土を作った偉大なる神と記述される。オオナモチと対になって現れるスクナビコナという名の小人神は、古代においては互いに密接に関係していた二つの技術、魔術と医術を人間に教えたと言われている。

以上に述べたのが古神道の主要な神々の一部である。これらの神々は自然神であって、祖先やその他の人間の神格化ではない。古代の人々が神觀念に導かれる二つの道筋、すなわち、自然物・自然現象の人格化及び人間の超人化に関して、初期の段階の神道は前者の道筋を辿り、後者の道筋には至らなかった。古神道には、人間に準ずるタイプの神格化の例は2・3あるけれども、本物の人間の神格化の例はない。それゆえ、しばしばヨーロッパの学者や現代の日本学者でさえも信じている、神道は元来祖先崇拜の信仰であるという主張を、われわれはどのように理解すればよいのだろうか。何故アマテラスがミカドの始祖であると呼ばれ、伊勢や出雲の神殿が純潔な祖先信仰の社であると呼ばれるのであろうか。ここが真正な祖先信仰の地であることは疑問の余地のないことであって、いまさら指摘するまでもないであろう。しかし古代の日本においては、中央政権であろうと地方政権であろうと、世襲によって政権を保有したそれぞれの王家は、氏神と呼ばれるその氏独自に定めた守護神を持っており、その守護神を特に尊崇した。元を辿れば、自然神あるいは至る所に見られる類似の傾向に従って分類された類型神が、特定の王家の尊崇を得て、時の経過とともに祖先と考えられるようになった。今日、教養ある日本人で、自分たちがアマテラスオオミカミ、ワタツミノカミ、ムスビノカミ、神武天皇の軍団を先導するために

遣わされたヤタノカラス、その他、似たような氏神の子孫であると言う系図を信じる者はほとんどいない。ヨーロッパ人は、自分たちが日本人よりも軽信的であると示唆するような術語を使うことによって、自分たちの恥をさらけ出すことはよもやあるまい。

この種の祖先崇拜は、中国では一般的であり、ある程度は日本にも広まっている実際の祖先を崇拜する信仰とは、本質的に全く別物である。

最も古い時代を除いて、神格化された英雄を崇拜する数多くの例が見られる。この最もよく知られている例が、九世紀の政治家であり学問で名高い、天満宮(菅原道真)である。道真は今日、全国至る所に神社のある、非常に有名な神である。学生や教育者は特別な崇敬を払う。天満宮の崇敬は、中国における孔子の崇敬に大いに触発された。

神道には、神話学の研究者には良く知られている、観念の混乱の例が数多くある。自然物あるいは自然現象は、時にはそれ自体が神であったり、時には化身であったり、住処であったり、あるいは、多少とも擬人観に基づく存在の顕現であったりする。『あらし』の中でシェクスピアは、女神アイリスに自分のことを「水の架け橋にして女神ジューノーの使い女」と呼ばせている。ローマの詩人オーヴィッドの歌うアケロオスは、ある時は川そのものを指し、別の時は擬人化された川の神を指す。我々は、穀物女神ケレスと酒神バックスを、穀物とワインの同義語として話す。Sub Jove frigido〔under the open sky〕という熟語は、ジュピターが天候の神であったのと同様に、天候そのものを指す時代があったことを、我々に思い起こさせる。日本において、アマテラスは、偉大な神学者本居の言葉を借りれば、一時期は「天にある実際の太陽」であり、後に、太陽あるいは天の支配者となり、この擬人化された神格が太陽の特徴とは明確な関連のない多くの事跡を行うようになる。火の神を鎮める儀礼において、彼は時には火の神と呼ばれ、時には単に「火」と呼ばれる。更に重要なことは、火鎮めの儀式は、火きり臼を使って実際に火を熾し、そしてその火に崇敬の念を払うことから成る、その細部にある。今日においても、日本にはこの原初的な信仰形態を示す数多くの実例がある。新年には、井戸や家庭内で使う目的のために引き込まれている小川に、お供え物があげられる；建物が建てられる前の土地や開墾された農地は、先ず厳粛に鎮められる；太陽は、日昇時あるいは長らく雲間に隠れていて再び現われた時に、拝まれる。竈はある種信仰の対象物である。ここには物自体から明確に区別された神は存在せず、竈に付随する神話もなく、そして、たいがい名前もなければ、性別もない。神道に非常に原初的な信仰形態が多く見られることは、比較的未発達な宗教である明白な特徴である。

同じ結論を示すもう一つの特徴は、霊の概念把握が相対的に薄弱なことである。神道の古い神々は、(ハーバート・スペンサーやその学派には失礼ながら)ホメロスの神々のごとく霊的存在ではない。彼らは「霊的な神々」ではない。彼らは、死んだ人々の霊魂ではなく、生きている人間をモデルにして作られている。彼らは飲食し、結婚して子供を儲け、土地を耕し、病気になって死ぬ。彼らの死体は墓の中で腐る。これらは幽霊には見られないものである。実際、幽霊は古い記録に言及されているほど多くはない。神道は一般に死に関係することを嫌悪する。しかし神が霊魂であったり、霊的存在だと考えられている場合もある。神は天に住む。しかし神はまた、人間に祝福を授けたり災厄を齎したりすることによって、地上に顕現する。この二重性はどのように解釈されるべきであろうか。その答えは、神から発散する御魂(尊い宝石あるいは貴重なもの、すなわち、霊魂)がこれらの結果を生み出す。伊勢に居ますのはアマテラスの御魂であり、そして、古い神話によると、国造りと国土の平定に寄与した褒美として大神神社に祭られたのは、オオナモチの御魂であった。時には同一神社に二つの御魂、一つは善で他は悪の霊魂、がある。食物女神はしばしば食物霊を意味するウカノミタマと呼ばれる。

実質的には神道に神像はない。神像あるいは偶像の位置は、神体あるいは神の御魂が宿ると考えられている具体物によって占められている。ご神体は、鏡、剣、座布団、丸い石、首飾りなどである。それは神社の最も神聖な場所に箱に容れて置かれており、ほとんど人目に触れることはないので、神官でさえも時にはご神体が何であるかを知らないこともある。伊勢のアマテラス大神の鏡はご神体の一例である。物質主義的な庶民階層の日本人は、しばしば御魂とご神体を混同する。

聖と俗は、より発達した宗教におけるほど、神道においては区別されていない。ミカドは主権者であると同時に最高位の聖職者でもある。彼が聖職者としてのほとんどの職能を委託していたのは事実であるが、いくつかの重要な神道儀礼においてはミカド自らが主導的な役割を演じた。神道は、古代においては全ての職能がそうであったように、その職務がある特定の家系に世襲される、いわば、太政官であった。しかし彼らは別の機能も持っており、司祭階級を形成しなかった。彼らは聖職者として特別の衣装を持っていなかったし、妻帯を禁じられていた訳でもなかった。今日においては、一般の神道職員は普通の世俗人に過ぎない。彼は特別の訓練も受けないし、実際、その主要な職務が時折祝詞を読み上げることと神社の修繕を監督することである神道職員にとって、訓練は必要ではない。彼は聖職者としての任務を負わないし、また誰も彼に精神的あるいは倫理的な指導を期待

したりはしない。いわゆる神葬祭を執り行うようになったのは、1868年の明治維新以降に始まる新制度にすぎない。

神道の神々に対する供物は、元来、食物・動物あるいは野菜・及び酒から成っていた。これらの供物に、布が織られる前の繊維の形が布切れまたは衣装のいずれかが、後に加えられた。この布は、今日扇形の紙が取り付けられたお馴染みの御幣によって代用されており、この御幣はどここの神社でも見受けられる。神々は奉納された食物を実際に食べたり、着物を着たりすると考えられている訳ではない。古い礼拝式の一書にあるように、供物は「崇敬の徴」として奉納される。

神道の最大の弱点は、確固とした倫理的要素の欠如にある。官人及び庶民の穢れを払うため年に二度催行された「大祓」の詞には、神々から見て罪・穢れとなる罪障表の中で、近親相姦、呪術、負傷、及び農耕の妨げとなる特定事項が言及されている。しかし、それで全てである。その外に言及されている罪障は、いくぶん儀式的性格のものである。傷害や殺人でさえも、倫理的汚辱を伴うと言うよりは、穢れを引き起こす原因と考えられた。負傷した人は、傷を負わせた攻撃者と同様に穢れていると看做された。どんな形であろうとも、死人及び病人と接触した者は、祭事に参加することは不資格となる。ここには、レビ記の律法との数多くの類似を認めることができる。それは古代日本人が道徳を持たなかったという訳ではない。神道は結婚の認可もしないし、姦通の非難もしない。しかし、姦通が法廷において訴訟案件となり得ることを我々は知っている。実際、全ての組織化された共同体が存続する為には、道徳上相当な進展が必要である。近代日本人は神道のこの欠陥を否定することはできない。しかし、彼らは、誰でも本能的に正邪の区別を知っているから、道徳律は不必要である、と主張する。神道は、「己の良心の命ずるままに従え」と教えている、と言われてきた。しかし、神道は、その種のことに付いて何も語らないし、道徳的な格言も残してはいない。「良心」という単語さえ、神道語彙の中にはない。

日本への仏教の伝来は、長い間神道にほとんど影響を及ぼさなかった。しかし、8世紀になると、神道が徐々に仏教儀礼や理念に浸潤されるという奇妙な変化が始まった。仏教はその教義を力によって普及させるのではなく、仏教宣教者たちは、イエズス会やその他の布教教団と同様に、聖職者集団を通じて普及させた。彼らは、アマテラスは仏教でいう大日如来の権化に過ぎないということを見出し、そして神道のほとんどの神々についても同様な相対仏を見つけ出した。非常に人気のある軍神八幡を、本当は神道の神であるか、あるいは、仏教の仏であるか、断定するのは容易ではない。古神道の黄泉は今では悪人ど

もの拷問の場所となり、清い心と道徳は単なる儀礼的な清浄さについて称揚されるに過ぎないが、一般的には教義の深化や精神性について大いなる進展が見られた。しかしながら、19世紀の初頭には反動が始まった。有名な神道学者の本居や平田は、固有の信仰である神道に外国宗教の密かな侵入があるのに憤慨して、多大の熱意と精力を注いで「純粹神道の復活」に専心した。彼らによって始められた運動は、実際には復古主義であり、宗教的観点からは利得よりは損失であったが、ある程度の成功を収めた。彼らは多くの信奉者を得たし、またその復古主義的考え方が1868年にミカドを復権させるのに非常に重要な影響力を發揮した。というのは、彼はアマテラスの子孫として正当な資格があったからである。神道の神社から仏教の僧侶や仏教儀礼を追放したのも、大部分はこの大義によるものであった。

武士道と言う名の下にこの国で最近ある程度の注目を集めている道徳的理念に関して、神道がどの程度寄与してきたか、という疑問が起こる。その疑問に対する答えは、ほとんど寄与していない、と言わねばならない。神道には議論すべき道徳的理念などはない。国民精神たる大和魂の横溢した武士道は、大要、中国起源のものである。17世紀及び18世紀において、日本の支配階級は驚くべき熱意と勤勉さをもって古代中国の道徳的教訓や歴史及び哲学の研究に没頭した。漢学者（中国漢王朝の文献研究者）として知られる学者の一派は、この情報源から派生した勇氣、無私、礼儀、親切、儉約、忠節などに関する高潔な理念を、国民的天賦の才能に従って例のごとく修正した、無数の論文の中で宣伝した。武士道とは実際何であるかを知ろうとする者は、漢学者の益軒、白石、とりわけ、鳩巢の著作を研究すべきである。漢学者と僧侶の間には公然と持続的な論争があったが、武士道は後者〔僧侶〕の思想的恩恵をほとんど受けてはいない。後代の武士道のある特徴に関して、例えば、負傷した敵の扱いにおいて最後の一撃に替えて赤十字に任せることや、従前の武士の徳目として名誉ある地位を占めていた仇討や切腹の廃止について、我々はキリスト教の影響を信じなければならない。

神道に偉大な将来を予見するのは困難である。特に仏教や中国思想の付加物を取り去った時、神道はあまりにも未発達な信仰であって、最近急速に文明開化を成し遂げた国民の精神的及び道徳的渴望を満足させるには程遠い。神道は、過去の仰々しい儀式の単なる形骸化に過ぎない儀礼においても、彫刻や建築技術の使用においても、あるいは、衣装や教団組織においても、さらには、思想の深遠さや道徳的教えにおいても、その偉大な好敵手である仏教と当面競争することはできない。そして今、キリスト教もまた同じ土俵に上

がってきている。

参考文献

- 小野祖教 『改訂増補・神道の基礎知識と基礎問題』 神社新報社、1988 .
國學院大學日本文化研究所(編) 『神道事典』 弘文堂、1994 .
白石喜之助・山本節 共訳(W.G. Aston 著) 『神道：日本の古代宗教』 新生堂、1930 .
補永茂助・芝野六助 共訳(W.G. Aston 著) 『日本神道論』 明治書院、1922 .
三浦佑之 『口語訳・古事記〔完全版〕』 文芸春秋、2002 .
宮家準 『民族宗教と日本社会』 東京大学出版会、2002 .
安田一郎 訳(W.G. Aston 著) 『神道』 青土社、1988 .

Aston, W.G., *Shinto: The Way Of The Gods*, Longmans & Co.: London, 1905.

Aston, W.G., *Shinto: The Ancient Religion Of Japan*, Archibald Constable & Co. Ltd., : London, 1907.

Aston, W.G., "Shinto", *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Volume 7, 1908.